

大宇宙と小宇宙(人間)間の祈願と環境科学
 -大宇宙の法則と人間の法則、3次元の健康体と4次元の祈る心-

沢 勲*・中 良紀**・朴 永炅**・肥塚 義明*

(洞窟環境 NET 学会*・大阪経済法科大学**)

Prayer of Macrocosmos and Mikrokosmos (Human) and its Environmental Science

-Law of the Universe and Human Law,

Three-dimensional Healthy Body and Four-dimensional Praying Heart

Isao SAWA*・Yoshinori NAKA**・Yong-Kyung PARK**・Yoshiaki KOEZUKA*

ABSTRACT

This research is a part of a comprehensive academic survey aimed at clarifying the history of the area and preparing documents of cultural heritage studies. In this paper, Prayer of Macrocosmos and Mikrokosmos (Human) and its Environmental Science, An event realized in each ancient region. Here, the author could explore the fields of Law of the Universe and Human Law, Three-dimensional Healthy Body and Four-dimensional Praying Heart, and we could compile a part of it.

Every phenomenon occurring on this earth has a certain law. The earth is going around the sun receiving the benefits of energy. Even if things are thrown towards the sky, there is a law of gravitational attraction falling toward the earth. Humans are not the law of collapse but the law of construction.

There is a law in this universe. The law is similar to human law. Humans oocyte and sperm are combined and cell division takes 280 days to make a perfect human being. A collection of atoms is a molecule, and the molecules gather to form a single cell.

As the brain develops, people with higher-order functions are born. Law of the universe lives with intention, the earth is a life entity with a heart.

There are certain laws in the universe, and humans are made use of in the law of flowing. We appreciate being alive and want to live with the universe!

キーワード: 大宇宙、小宇宙、心の調和、心の安らぎ、祈り、遺伝子

Keywords: Macro-cosm. Micro-cosm. Harmony of the mind. Peace of mind. Prayer. Gene.

[洞窟環境 NET 学会 紀要 9 号][Cave Environmental NET Society(CENS) 、Vol.9(2018), xx-xxpp]

目次

1.はじめに

2.科学的に祈る力

3.大宇宙と小宇宙との調和

4.小宇宙(人間)と祈り

5.祈りの実践

6.おわりに

謝辞 参考文献

1. はじめに

本研究は、地域の歴史を明らかにして、文化遺産学の資料を作成することを目的としている総合学術調査の一部である。本稿は、大宇宙と小宇宙(人間)間の祈願と環境科学、古代の各地域において実現された事象である。ここでは大宇宙の法則と人間の法則、3次元の健康体と4次元の祈る心の分野を探求し、その一部を纏めることができた。

大学院時代に博士後期課程を終えて、その5年間後に念願の学位論文に合格し、授与されたが、就職浪人時代が長くなった。同期生は安定した地位で社会にて多くの貢献をする姿がみられた。博士浪人中に、金属工学科の在学から恩師の故高橋信次先生の話聞かされ、高橋信次先生の著書を10冊以上拝読した。

生前の数年間に、広島市の後援会の時に、あるホテルでお会いした。あなた(沢)は、2世紀にドイツで物理学を学んだと言われ、今生では、電子工学を勉強するために生まれたと聞いた。さらに、人生にはそれぞれの立場があつて、目的と使命がある。それを聞いて、今も参考にしている。

生前の高橋信次先生の講演を拝聴後、自らの意思決定時には多くのことを参考にしている。すなわち、高橋信次先生の講演の内容は、執着を捨てると、安らぎの境地に到達した気分になれたという。高橋の「守護霊」は「フワン・シン・フワイ・シンフォー」であるとし、後にイエス・キリストその人であると設定され、後に、歴史上のモーゼ／ヘブライ人奴隷であると設定されたと言われた。人々の過去・現在・未来を見通すというフレコミ等で人を集めた。また肉体を持たない「霊」を霊視(文字通り霊を目視すること)し、これとコミュニケーションして、人々についているという。古代エジプト語、ヘブライ語、5世紀の中国語、古代マガダ語(マガダ国)等を少し話すことができた。

さらに、これらはいくまで人々を救うため、天上界で予め約束されていた(また証明としての)「方便／布教」のものであるとした。モーゼの時代にも、イエス・キリストの時代にも、ゴータマ・シッダールタ(釈迦牟尼仏)の時代にも、現れた現象だとされ、特に調和された世界とされた。その精神は、「法」(自然の法則、宇宙の法則)に発するものであり、時代背景によってモディファイされているが、本質は変わっていない。

ゆえに、人間は、転生輪廻のプロセスの中で永遠の生命力を有していると講演されていた。高橋先生は、時代が変わっても変わる事のない「正法・神理」(神が定めた自然の法則、「法」とも)、すなわち釈迦、イエスが説いた教えと大差ないことを主張し、魂の实在、实在界(あの世)の实在を説いた。各人の魂は死後、その人格(魂の光の量として反映する。神との調和の度合いが高いほど、光量が多い)にリンクした地位に赴くとした。

各人の魂の成長及び地上の調和のための方法である釈迦の説いた八正道を基礎とし、不調和な想念と行為により、自らが作り出したとされる精神の汚れをぬぐい、本来、魂が受けているとされる神の光を受けるために必要とされた。「反省／アンテナ」の重要性を訴えた。また、反省後の想念・行為の実践を重視された。人々の心と心の調和のとれたユートピアの建設するため「八正道」に基づく「反省」をすることを目指した。疑問がすべてなく

なったときに到達するものは、神理(神の摂理・自然の法則)であると位置付けている。

先生の教えから、筆者の一人が奉仕したことは、高橋先生のご著書を、外国語の翻訳に熱中すると、欲の世界から人間らしい世界に変わり、肉体精神が軽くなり、自然や社会に感謝するようになった。その後、自分詩を創作すると素晴らしい現象が体得された。社会に愛されていること、家族に愛されていること、万象万物に愛されていること等が、心から感じられるようになった。

高橋信次先生の単著である『心の原点』は、泣きながら何回も繰り返しながら拝読したことがある。年齢48歳になって、就職もできず、私は心を磨くためであると痛感した。一方、高校時代は、義母と同居して三年も気が狂いそうであった。座禅(反省)を20回以上もすることによって、義母に申し訳ないと思う時に涙と鼻水が流れた。その後は、深い怨念や憎しみが薄れていった。友人関係にも同様なことが、漸次に溶解されるようになった。祈願に関することに対して科学的に祈る力を纏め、次に大宇宙と小宇宙との調和を考察した。さらに、小宇宙(人間)と祈りの実践を纏めることはできた。

2.科学的に祈る力

祈りの力科学とは、昔、ジョセフ・マーフィー師は科学的祈りという言葉で説いていた祈りの方法は、内なる心(潜在意識)が神(至高の存在)であると認識して、潜在意識に祈ることである。それは、神や仏からの助けが必要なのではなく、本当の神(至高の存在)は、自分自身の内に秘められている真実である。表面意識ではなく潜在意識の真理を認識できると、祈りも変化する(図 2-1)。自分自身には嘘がつけないから、自分に向かって祈ることである。我々には潜在意識が存在している、その深層は、宇宙意識のような、無限な一体的な意識にまで繋がる。そこから、私たちが潜在意識に対して祈ると、宇宙の法則さえも作用し始めることになる。心に潜む神に向き合う方法の一つが祈りである。神の存在を信じる気持ちの方が重要であり、内なる神に向かって挨拶するだけでも良い。感謝の気持ちを伝えることは最高であろう。潜在意識は神と同等で、すべてを知ること、すべてを知っているから、解決する方法も知っているといわれる。潜在意識はすべてを知っているから、と信頼して、任せてしまうのが良とされると、考えている通りに現実になる。すなわち、確信を持って進める人は幸いです。

図 2-2 の潜在意識の法則では、心が変われば現実も変るといふ。それは、考えていることが現実であるからである。「潜在意識の法則」の根幹は、「宇宙の法則」と同様である。祈りは、神(潜在意識)を信頼して委ねるような意識になるための方法と考えられると、安心感、満足感、自由な心を意識して、内なる神(潜在意識)に祈り続けることである。(スポンサーリンク)。

<http://inori.ki22.net/> 祈りの力科学。

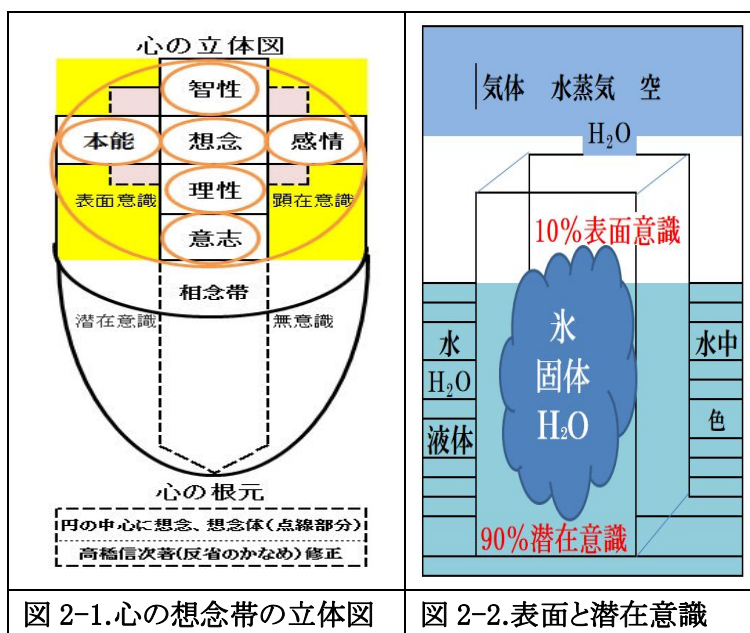


図 2-1.心の想念帯の立体図

図 2-2.表面と潜在意識

反省 (Reflection) は、一般的には、自分がしてきた行動や発言に関して振り返り、それについて何らかの評価を下すことである。筆者は、自分の行動や言動に「してあげた点」と「迷惑をかけた点」を時系列的に意識し、改めようと心がけることである。ジョン・ロックは反省を、外的対象に向けられる感覚に対して、意識の働きに向けられた内的感覚と考えた認識論を参照。アリストテレスは、「感覚」を五感に制限して内的感覚を否定したが、プラトンは、「精神の目」を認めていた。カントは、これを「内的直観」と呼び、ヘーゲルは、「反省」を、相関的な関係を持った二つのもの間にある相互的反射関係を示すために用いた。<https://ja.wikipedia.org/wiki/反省>。

帰還・フィードバック (Feedback) とは、①ある機構で、結果を原因側に戻すことで、原因側を調節すること。電気回路では、出力による入力自動調整機能、生体では代謝・内分泌の自己調節機能など。②物事への反応や結果をみて、改良・調整を加えることを意味するものである。

心と肉体との電子回路的な仕組みは、人間の五体と五官の発信によるパルスと受信によるパルスによって分析が可能である。その作用が波によって大脳に伝達する。それから心の動作である意志に伝わり、最後は心の記憶装置である表面意識に伝達される。フィードバック (帰還) 制御とは、入力と出力を持つシステムにおいて出力結果を入力側に帰還し、入力と出力を比較することによって所望の出力となるように制御する手法です。出力の一部を、入力にもどすことを帰還という。負帰還とは帰還した信号が入力信号と逆相の場合であり、正帰還とは帰還した信号が入力信号と同相の場合を正帰還と呼ぶ。フィードバック制御は、特に負帰還と呼ばれ、制御回路の設計手法で、高精度の信号処理が可能となる。入力が $M - \beta M_f$ になるものを負帰還という。電子回路の設計で負帰還は

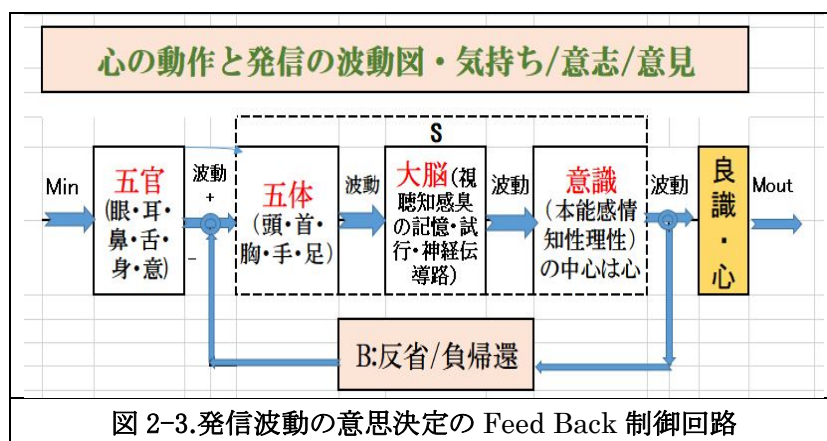


図 2-3. 発信波動の意思決定の Feed Back 制御回路

図 2-3 のようなブロック図で表示できる。

M_{in} = 入力信号、 M_{out} = 出力信号を図のように β 倍されて入力へと帰還され、 M_{in} と差分をとる数式は。

$$M_{out} = S \times (M_{in} - \beta M_{out}) \dots \dots \dots (2-1)$$

ようになる。式(2-1)を変形すると次のようになる

$$M_{out} / M_{in} = S / (1 + \beta S) = 1 / (1/S + \beta) \dots \dots \dots (2-2)$$

電子回路の設計では、図 2-3 の S の部分にオペアンプを用いると電圧増幅率が大きな回路になる。よって、式(2-2) の $1/S$ は非常に小さな値となると、式(2-3)のようになる。

$$M_{out} / M_{in} = 1 / \beta \dots \dots \dots (2-3)$$

電圧増幅率が $1/\beta$ となり、 β 値で決定できる。



図 2-4. 心の受想行識の世界

坐禅(ざぜん、座禅とも)とは、仏教では、姿勢を正して坐った状態で精神統一を行う、禅の基本的な修行法される。坐禅は瞑想(Meditation)と翻訳される場合があるが、眼を閉じて思考する瞑想と坐禅は別概念である。なお、『ヨーガ・スートラ』に説かれる古典的な意味でのヨーガ(瑜伽)も、坐禅と同じで、立禅や動禅・歩行禅・経行(きんひん)などがある。<https://ja.wikipedia.org/wiki/座禅>

肉体・脳と神経のパルスがあるから生存している。3次元である人間は、これらの機能と遮断されると4次元化される。心の立体図は、心を上から見た図で、円の中心に想念帯がある(図 2-4)。その周辺は、上下左右に智性、理性、本能、感情の他に意志がある。心の立体図は、表面意識(顕在意識・意識)と潜在意識(無意識)そして想念帯(点線部分)がある。すなわち、想念活動が記録された心の壁も切り開いている。座禅とか反省の行為によって心が変わると、表面意識(顕在意識・意識)によって想念帯(点線部分)の壁が崩れ、心の内部の潜在意識が、表面意識に流れると過去の光景や智慧が生じる。心の根元である魂は、相念をはじめ各機能が集約される所である。

3.大宇宙と小宇宙との調和

大宇宙体(自然界・マクロ・コスモス)と小宇宙体(人間界・マイクロ・コスモス)との霊信回路の設置である。大宇宙体には、①地(大地)の世界・②水(雨)の世界・③火(太陽)の世界・④風の世界・⑤空(空気)の世界の五大世界がある。それぞれが鉱物・植物・動物・人間の存在領域に対応する五大領域が身体構造にあたる。自然界を構成する天体や自然現象は、我々の祈りを呼応していると感じられる。人間は、その巨大な磁場の中に存在するので、逃げることはできないのである。すなわち、自然界を構成する基本元素＝人間界を構成する基本元素は同じである(図 3-1)。

自然界＝客観的自然の意味とは、「自」とは「自分」意味で、「然」とは、状態を意味する接尾辞の結合である。すなわち、自分のままの状態＝自分の状態である。この現象界の太陽系は大宇宙体の小さな諸器官の一つで、地球は、その小さな細胞体である。細胞にも意識があり、全生命のエネルギー集合体であることを悟るべし、大宇宙体は、大神体の大神殿であって、ゆえに、地球も神殿である。大神殿であって、万生万物における魂の修業所であるから魂の修業所である人間は、大宇宙体の照応する原理からすれば、黄道 12 宮の一週と人間の一日(呼吸数)と共振している。その意味は次のように考察できる。

黄道12宮とは、春分の日を起点として黄道に沿って30度ずつ12等分したのが12宮である。2160年とは、地球の自転軸の傾斜は、歳差運動のため別の星座に移動する時間である。12星座が1周するには、2160年×12回=25,920年もかかる。

これを「プラトン年」・「大年」という。人間の呼吸する数は、1分間で18回である。1日の回数を計算すれば、18

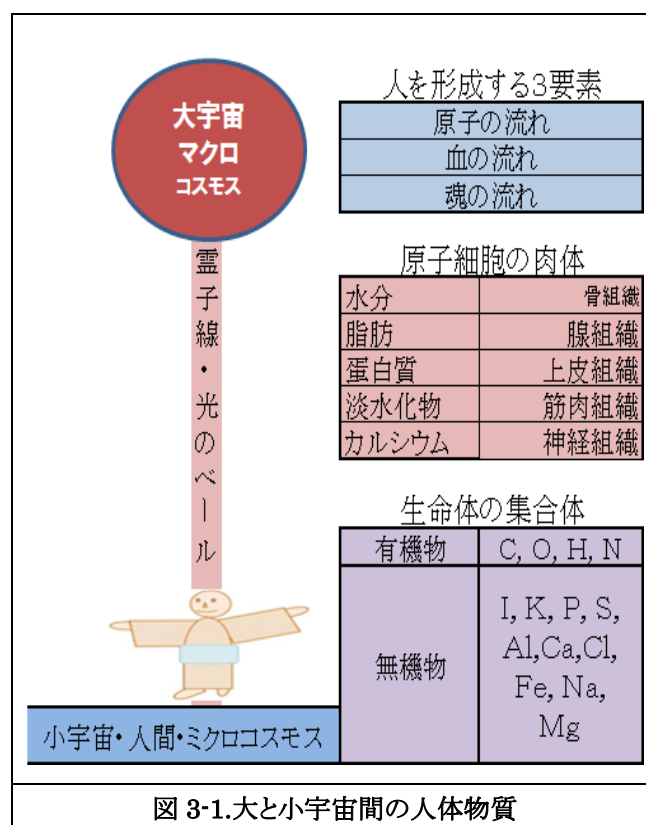


図 3-1.大と小宇宙間の人体物質

回×60分×24時間=25,920回/1日である。したがって、黄道12宮の1周と人間の1日の呼吸数は、25,920で数字で一致している。これを12で割れば2160回である。これは、一つの星座が影響を及ぼす期間:星が流入する力のエネルギーである。人間の2時間とはその期間の呼吸数2160回で、人間の仕事の単位は、一息つく時間間隔である。時間間隔は、仕事と休憩を含めたもので、宇宙と人間のバイリズムや時間感覚にあった期間設定のようである。人間の1日の呼吸数25,920回=黄道12宮の1周、呼吸数25,920回/黄道12宮=人間の2時間の呼吸数2160回=星が流入する力のエネルギー(18回/分)×120分=2160回、人間1年間の呼吸数=25,920回/1日×365日=946万800回である。

4.小宇宙(人間)と祈り

4-1. 人間とは

4-1-1.人間の定義(人間の自然本性・「人間らしく生きる」)

智慧人	叡智的能力の理性	工作人	自然や社会を人工的に改造
遊戯人	日常的に意味ある神聖な遊戯	苦惱人	苦悩する人間
象徴人	刺激と反応間の象徴を介在	創造人	破壊本能から新文化を生成
語る人	連続性の文節後に形成する者	制御人	本能、感情、知性、理性の調整

4-1-2.人生の目的と使命

業(カルマ)の修正	人間がこの世に生まれて来た目的の一つ。自分の心に潜む自分でも気付けない「心の傾き」を修正すること。前世と現世の業の関係を修正する。人生とは、ただ楽しくおもしろおかしく生きてはいけない。過ちを繰り返さないような勇気と努力をすること。自己保存 自我我欲に偏らない生き方を見直すこと。毎日、反省し悔い改めお詫びする。そして幸せになり安らぎと悟りを持続する。
新しい学習	言葉から偉大な力があることを学習する。幸せになることと安らぎと悟りへの学習を持続すること。魂の次元の霊格を見抜く方法を学ぶこと。
社会奉仕	人間は、受精に始まって死に至るまでの個体の発生と動物としての生活をする奉仕精神を実行すること。話す人と聴く人はお互いを具体的に把握し合うことができる社会奉仕に努める。一方、文字言語は、書く人と読む人が時間的空間的に隔たりがあるため奉仕する。言語で表現された明示的情報だけが強調されることでなく、音声言語より抽象性が高くなるように努力する。人間とは、何かを考える動物であり、感謝と奉仕によって、安らぎが得られることを体験すべきである。

人間の自然本性(Nature)・「人間らしく生きる」

英知人:智慧人	Homo Sapiens	瑞の生物学者リンネ『自然の体系』1735。叡智的能力の理性
現象人	Homo Phaenomenon	独の哲学者カント『人倫の形而上学』1797
本体人	Homo Noumenon	独の哲学者カント『人倫の形而上学』1797
工作人	Homo Faber	仏の哲学者ベルクソン『創造的進化』1907。自然や社会を人工的に改造
遊戯人	Homo Ludens	蘭の歴史家ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』1938。日常に意味のある神聖な遊戯

苦悩人	Homo Patiens	豪州(オーストラリア)の精神科医フランクル『苦悩する人間』
象徴人	Homo Symbolicus:	刺激と反応間の象徴を介在
創造人	Homo Creation	破壊本能から新文化を生成
旅人	Homo Viater	光を目指す実存者
語る人	Homo Loquens	連続性の文節後に形成する者
制御人	Homo Controls	本能、感情、知性、理性の調整

4-1-3.人間の実存条件の3要素

時間 (Time) 的に生きる	過去と現在と未来を時間的に位置づける。誕生から死の瞬間まで。歴史の認識。
空間 (Place) 的に生きる	人体には頭部・胸部・腹部に手足が付くのが身体基本構造である。中心として上下・左右・前後に相対的な3次元の空間が開かれる。
人間(じんかん・Occasion)的に生きる	人と人の間柄としての人間的(人間関係的)な制約を被っている。生きる≒息をして生きる

4-1-4.人間の生(Life)の3要素

生命	いのち	尊厳の根拠を問う	霊	霊	霊性的次元	人文科学	哲学・論理学・文学・美学
社会	生活	人間関係を営む	魂	心	心理的次元	社会科学	地理学・法学・経済学・商学
自然界	生命	非物質	体	身	身体的次元	自然科学	医学・工学・生命科学・理学

4-1-5.人間の生き甲斐

立身出世	成功	地位の獲得	名誉の獲得	資産の増大
財産の増大	家内安全	健康増進	民族の保持	子供の教育
奉仕精神	地域連携	張りあい	願望の到達	息をする

これらは人生を最後まで支え切れることは困難である。人生の不安や危機に暴される特質がある。

相対的なものであれば、裏返すと絶対的なものがあるでしょう。

4-1-6.人間の生き方

楽しく生きる	正直に生きる	美しく生きる	立派に生きる
一生懸命に生きる	贅沢に生きる	奉仕して生きる	感謝して生きる
生きてゆく	生かされている	生きている	息をしていきる
不器用に生きる	無愛想に生きる	狡猾に生きる	自我我欲に生きる
自己本位に生きる	不平不満に生きる	迷惑に生きる	無責任に生きる

4-1-7.人間の生きで行く姿

①遅しくいく	本能行動と情動行動	個体繊維と種族保存の生命活動	大脳辺縁系が関わっている	生まれながら備わっている
②うまく行く	適応行動と創造行為	外部環境に対処する技術的存在者	新皮質系が関わっている	学習によって経験を積む
③よく行く	本来の目標と設定行為	価値を追求、実現を図る人格的存在者。	いき(熱)する	自然な自発性を図る人間の側面
④生きで行く姿		動物的な生き方	植物的な生き方	人間的な生き方

4-1-8.人間の世界観の3要素

自然主義	認識論としては感覚論	存在論としては唯物論。科学革命	機械論的世界観で自然過程の産物がIT産業
自由の観念論	人格や自由の観念論	自然の因果法則を超越した精神や立法の理性	論理的規範や義務の意識
客観の観念論		特殊な論理を究明するには、全体との有機的関係を考察	全体から部分を総観し、生関連を世界関連に高める

世界観には、観念論(Idealism)と唯物論(Materialism)の二大潮流に分岐できる。**観念論とは**、存在論的な意味では唯心論、人生観の意味では理想主義で、客観的と主観的(自由の観念論)なものがある。**広い世界観△3項(自己・超越者・世界)**。人間は、本来神仏であり超越者である。人間を超越することは自我の世界を突き破ることであり、更に広い境界を包摂することである。それは、超越者の生命磁場の中に自我の世界を包み込んでいるからである。人間は超越者の生命磁場の内でこそ、呼吸して生きていることである。人間と超越者との関係は、親子、夫婦、上下の人間関係などである。

4-2.祈り(Prayer)とは

4-2-1.祈りの意味

祈りは小宇宙の我と大宇宙の神と結ぶ制御であり、通話線である。祈りは、小宇宙の我と大宇宙の神との会話を可能にできるプロセスである。人と人が電話で話すように、神は私たちが御自分に話しかけるよう願っている。現代社会人にとっては、携帯電話と他の数々の機器は必需品となりつつある。相互の交流、話し合いのコミュニケーションを可能にした伝達方法である。心と肉体、人間と宇宙との関係を簡単に表わす言葉である。神仏と魂の一体化、自分と守護・指導霊との調和をはかる想念行為である。祈りには、個人の調和度によって、行為の度合いが高まる。

①生命エネルギーが活性化する原動力	②生命がその本源から湧出・流出する	③生命の宣言	④生命の開頭
-------------------	-------------------	--------	--------

⑤生命の根源から働くもの	⑥い(生)の(宣)り	⑦いきいきと生きる	⑧息をする
⑨超越者	⑩感謝で、行為である	⑪天と地をつなぐ架け橋	⑫神仏との対話である

神仏との対話には、各自の守護霊・指導霊との対話、諸如来・菩薩との対話、諸天善神との対話、大宇宙・大神霊との対話があり、祈りとは、宇宙の真理に対して、自分の心を言霊によって表現することである。請願・瞑想・懇願・導通・頼む、「願う」ことから「祈り」を現す意味であって、拝むとか、暗記するものでもなく、自然体で実践する中で行為することである。実践する中で生命が宿るのであることで、神聖視する対象に何らかの意思交信を図ろうとする人間の行動様式である。神に対して自分の考えや思いを表現するものでもある。

外形的には、祈祷者の独白ないし語りかけ(呪文や経典教本)、または黙祷という形をとる。瞑目、平伏、合掌あるいは行進(歩行)などの身体動作、姿勢や舞・踊りなどを伴う場合もある。祈りは、個人で行われることもあり、集団で行われることもある。付带的に供物などの奉げる(ささげる)ものを添える場合もあり、定義は曖昧なもので、最も基本的な宗教活動や民間信仰のことである。

4-2-2. 祈り(Prayer)の段階

①凝念	Dharana: Concentration	心が特定の場所に凝縮すること
②静慮	Dhyana: meditation	凝念の対象とする想念を延長させること
③三昧	Samadhi: Contemplation	静慮が思考する客体になり、自体が遊離され、無の時をいう

4-2-3. 祈りの効用

①遺伝子がオンになる	②宗教と限らない	③心の底から祈る
④植物・動物にも聞いている	⑤祈りと薬の効用は同じ	⑥自分を越えられる
⑦ブレない人生を実現	⑧病気が治る可能性	

4-2-4. 祈りとは生きるテクニク

①祈りの姿勢	②祈りのとき	③祈りの言葉
④祈りの場所	⑤祈りのコツ	⑥祈りの習慣

5. 祈りの実践

祈りとは、天と地のかけ橋で、精神的な過程を通して発生するエネルギー-のものでしょうか？ それは人間が肉体を持ち、あの世=天上界=実在界から地上に生を受けた時から始まっている。ここで、あの世=天上界=実在界とは、「心のふるさと」である。人間が最後に求めるのは、自分の「魂のふるさと」である。「魂のふるさと」こそ、救いの手を差し伸べてくれる「もう1人」の自分自身であることを自覚するほかはない。「もう1人」とは、祈りの中に述べている潜在意識層の守護・指導霊である。この世の使命を果たすためには、人間は「祈らず」にはいられない。「祈り」とは、感謝の気持ちで、「魂の向上」でもある。「祈り」とは、「即実践行為」であるため、神仏と調和し、神仏を思い起こす「想念エネルギー」であるからである。ところが、人間は肉体を持つと、五感に煩惱という迷いに埋

没される傾向が多くあり、煩惱に振り回されている時、過去を反省し、助けを祈る時に、潜在意識層の守護・指導霊が救ってくれるものでしょう。守護・指導霊に力がない場合は、より高い次元の天使が慈悲と愛の手を差し伸べるものでしょう。「祈り」とは、自分自身の「魂のふるさと」を思い起こす想念で、同時に、自分を見直す＝反省でもある。単なる祈りではなく、真面目に「祈り」の時には、「慈悲と愛」の与えてくれるのです。

5-1.大宇宙大神霊への祈り

大宇宙大神霊・仏よ、我が心に光をお与えてください、心に安らぎをお与えてください。心行を己の糧として、日々の生活をします、日々のご指導心から感謝しています。(高橋信次、1975)

5-1-1.大宇宙とは

「宇」とは、天地四方上下の三次元空間全体で、天の世界である。「宙」とは、過去・現在・未来、時間全体を意味し、地の世界である。「宇宙」で時空(時間と空間)の全体を意味し、天地の世界を意味している。「宇宙」の定義には、次のように纏められる。①宇宙全体の一部を「小宇宙」と呼ぶのに対して、宇宙全体のことを「大宇宙」と呼ぶ。②「宇宙」とはすべての天体・空間を含む領域であり、銀河を「小宇宙」と呼ぶに対して「大宇宙」と呼んでいる。③物理学的観点からは、「宇宙」は物質・エネルギーを含む時空の連続体である。④「宇宙」は、「世界」全体ではなく、生成・膨張・収縮・消滅を繰り返しているとも考えられている。

大宇宙の全なる大神霊に対して、光と安らぎのエネルギーを求める実践行為である。大宇宙とは、生命発祥の母体であり、大宇宙なしでは、人間は生きられないのである。人間は大宇宙の強大な磁場中に存在するため、熱・電気・光エネルギーを求めている。その光エネルギーは各自の心の調和度によって降り注いでくれる。心の奥底から唱えると安らぎと調和が感じられる。安らぎとは、各自の魂・意識に光エネルギーが伝わる波動現象である。宇宙の法則に従って生活が適用される光エネルギーを身に受けると、大宇宙と同様な生活が可能となる。祈りとは、小宇宙である人間が大宇宙の子である自覚と感謝の心が湧き上がる人間本来の感情なのである。感謝の心が湧き上がるとすばらしい行為が実現でき、祈りの基本は感謝である。感謝の心は実行できないと本物にはならない。大宇宙大神霊の光のエネルギーを求めると同時に、祈りと心行を心の糧として、日々の生活をするのである。それは、人間は偉大な救を求め、求めた中から生活するように心掛けることから、幸福な生活が生まれるからである。

5-1-2.大神霊とは

天地根源の神であり、慈悲の光であり、縦の光である。大自然界に存在する法の中に調和の在り方を示し、静かに見守り、私達を導いてくれている。大神霊の意識は、慈悲の光で心の中に降り注がれている。これは、大宇宙大神霊の慈悲の光によって生じた現象である。心の在り方によって、慈悲の光を取り込んだり、逆に撥ね返したりする。慈悲の光が沢山取り込めますと、癒されたり、感動したりする。

悩み多い人は、沢山のストレスを抱え続け、心の中に闇を抱えてるからである。逆の人は、自分の心に向かい、真剣に純粋な気持ちで手を合わせ。大宇宙大神霊と向き合くと、邪気が身体から抜けられる。すなわち、反対に慈悲の光が心に注ぎ込まれて行くでしょう。心が開かれた方は、全身から、慈悲の光(オーラ)が放たれる。オーラがあることは、真心で、優しいお気持ちで生きている証であり、この光は、病を治し、運を開き、人生を輝か

せて下さる。心身のエネルギーとなり、良い人間関係を構築でき、人の病や災いをも退ける。光のない闇の呪術は妖力にしか過ぎなく、そこには、必ず好ましくない霊が介在するなのである。

5-1-3. 日々のご指導

日々のご指導とは、太陽は東から昇り西に没する、春夏秋冬の転生輪廻している日々の循環法則がある。植物の生体や動物の生活の姿は、我々に無言のうちに法則の実態や実相を教えてくれている。自然の姿、人間の存在を静かに連想する時に、不思議と感じ、大宇宙や大自然の計らいを感じる。大自然における日々の教えに対して、心から感謝の気持ちが湧き上がり、これが、神の命を受けた上々段階光の天使に、光を求め、感謝するための祈りである。

5-2. 天上界の諸如来・諸菩薩(光の天使)への祈り

天上界の諸如来・諸菩薩(光の天使)、我が心に光をお与えてください、心に安らぎをお与えてください。心行を己の糧として、日々の生活をします、日々のご指導、心から感謝します(高橋信次、1975)。

5-2-1. 天上界の諸菩薩とは、

あの世とこの世を善導する光の天使である。菩薩(ぼさつ、梵名ボーディ・サットヴァ(Bodhisattva) の音写、仏教において、一般的には、悟り(菩提, bodhi)を求める衆生(薩埵, sattva)を意味する。菩提薩埵とも音写される。

5-2-2. 天上界の諸如来とは

私達とまったく同じようにこの地上界に肉体を持たれて、神仏と表裏一体まで御自分を高められた天上界の諸如来、諸菩薩様に心から感謝する。我々にとって、短く感じながら愛の手をさしのべる人が光の天使である。人は混迷の淵に立って決断を迫った時、病床で苦しんでいる時、心を新たに、反省と祈りを行う気がする。そのような時に天使が、その人の魂・意識に光を投げ与え、その人を救ってあげる。人は諸如来の天使と深い接触があり、救いは、どんな人間にも与えられている。前世、過去世、あの世の生活は、人間が想像する以上に複雑で、今世は魂によっては困難なことがある。しかし、人間は、神の子であり、仏の子でもあるから、反省すると、天使の救はあるでしょう。祈りを唱えた時は、上々段階の大指導霊・諸如来、諸菩薩の光あるいは音が伝わるものである。

5-2-3. 高橋信次によると諸如来・諸菩薩

高橋信次によると諸如来・諸菩薩については、次のように要約できる。光の天使とは、仏教的には、諸如来・諸菩薩のことである。諸如来、諸菩薩は、神仏より命をうけ、この世とあの世で、苦界にあえぐ人々を善導している。上々段階光の大指導霊には、釈迦、イエス・キリストとモーゼがおられる。釈迦は心と法を伝え、イエスは愛を教えながら病める人々を救い、さらに、モーゼは数多くの奇蹟を世に遺している。真の正法とは、文証(心・法)、理証(科学)、現証(霊道現象、奇蹟、物質化現象など)の三つが揃って、はじめていえる言葉である。三つの証明のうち、一つが欠けても、正法とはいえない。釈迦も、イエスも、モーゼも、この三つのことをそれぞれの時代に合わせながら、生まれて活動を行っている。

5-2-4.高橋信次によると正法

正法とは、まず宇宙をつらぬく神仏の心であり、エネルギーでもある。そして、その神仏の心、エネルギーをベースにして循環(転生輪廻)の法を形成し、循環の法は、それがそのまま、神仏の慈悲と愛になって、大宇宙を形成し、支配しているものである。ゆえに、正法は永遠不滅であり、今も昔も、その神理は大自然のなかに、人間の心の中に息づいている。多くの衆生は、その正法の存在を忘れてしまっている。この地上を照らす灯台の灯火は、神仏の命をうけた、釈迦、イエス、そしてモーゼを含めた諸如来と諸菩薩であることを知っていただきたい。これまで、神だ、仏だと命(みこと)だといって、霊視のきくような人々の前に姿を現したものは、大抵は動物霊、悪魔と地獄霊が大部分である。悪霊の場合は、如来や菩薩の姿をみせても、長くは続かず、姿を消すか、形を変える。動物霊、悪魔は神仏に祭り上げられることを望むが、諸如来、諸菩薩はそういうことはない。

もう一つ大事なことは、実在の如来と菩薩であるなら黄金色に輝いている。後光がハッキリとみえ、美しく輝やき、見る者が納得するまでその形を崩すことがない。黄金色に輝きながら姿をみせる如来と菩薩は、すでに今日の仏像、仏画と聖画にみられるような姿をしておられる。如来と菩薩といわれる光の指導霊は、威張ったり、脅したり、不幸にしたりするとはなく、さらに、相手を責めたりはしない。常に謙虚であって、相手が悟るまで辛抱強く導いてくれるのが天使の心である。寛容と許しの中で、常に人々の下手にあって、衆生済度の生活に終始し、慈悲と愛の行為を続けてくれる。如来と菩薩は神仏の使いであっても、神仏そのものではない。神仏は、姿や形を絶対に、人間には見せない。なぜなら、神仏は大宇宙であり、大自然であり、あの世とこの世の生命意識を生かしている大意識、大生命体であるからである。

5-3.天上界の諸天善神への祈り

天上界の諸天善神、我が心に光を与えてくださり、心に安らぎを与えてくださる。我が心を正し、一切の魔よりお守りくださり、日々のご指導、心から感謝します(高橋信次、1975)。諸天善神とは、宇宙の法則を守り、光の天使の活動がやりやすいように側面から応援する天使である。さらに、あの世の人間の意識界とこの世との両面にわたって働く天使でもある。一方、光の天使になる修業活動の場所と役柄で、如来・菩薩をも救う力が与えられている。諸天善神は、神仏にならない。誤ちを犯し、救済を求めるのであれば、諸天善神の助けを借りるには、報恩と感謝の行為をおこなうべきである。一方、瞑想や座禅とか、事件の周囲に関する嫌なことを記録すると、涙や鼻水が流れることもあって、人間の魂を悪魔から守る法の番人である。すなわち、不動明王・摩利支天・八大龍王・大黒天・稻荷大明神をいう。

5-3-1.不動明王

不動明王とは、正道生活する者を守護する天使である。悪魔を降伏するために恐ろしい姿をし、障害を打ち砕き、正道生活する者を救済するという役目である「大日如来」の使者で、悪魔を降伏させるために恐ろしい姿とされる。お姿は、目を怒らせ、右手に宝剣をもっている。

5-3-2.摩利支天

摩利支天(原語:Marici)とは、太陽や月の光線の意味で、陽炎(かげろう)を神格化したもので、陽炎は実体がないので捉えられず、焼けず、濡らせずおよび傷付かない。正しい心で生活する者が誤ちを犯さぬように善導する天使をいう。

5-3-3.八大龍王

八大龍王とは、仏法を守る八体の竜神である。すなわち、難陀・跋難陀・娑迦羅・和修吉(わしゆきつ)・徳叉迦・阿那婆達多・摩那斯・優鉢羅の称。雨や水に関係することが多い。正道生活する者を守護し、人間以外の生物を統轄管理し、生物相互の生存に必要な措置を講じる天使である。

5-3-4.大黒天

大黒天とは、ヒンドゥー教のシヴァ神の化身。幸福をもたらすとされる七福神(エビス・大黒天・弁財天・毘沙門天・布袋・福祿寿・寿老人)をいう。光の天使を側面から応援する天使で、地上の正しい道を実践する者、正法を護持するための経済的援助をはかる天使。

5-3-5.稲荷大明神:

稲荷大明神とは、日本の神の1つ、稲荷神、お稲荷様、お稲荷さんと穀物の神である。五穀豊穰の手助け、情報の収集、正しく生活する者を助ける天使である。手段は、ある特定の動物霊を指導し真理を教え、その動物霊を手足のように使う天使である。古来より、御神徳は「衣食住の大祖にして、万民豊樂の神なり」の説がある。「神は、人の敬によりて威を増し、人は、神の徳によりて運を添ふ」との深い御神縁としての説もある。

5-4.守護・指導霊への祈り

我が心の中にまします守護・指導霊よ、我が心を正しくお導きください、心に安らぎをお与えてください。日々のご指導、心から感謝します(高橋信次、1975)

5-4-1.守護霊への祈り

守護霊とは、潜在意識のある本体と分身である。人などに付き、その対象を保護しようとする霊であり、人などを守ろうとする意思を持っている霊的存在である。先祖などと縁のある故人、また良い行いと徳を積むことでも良い霊であり、災難にあわないよう守ってくれている霊でもある。守護霊は魂の6兄弟(生命の本体1人と分身5人)の1人で、専属的に守っている霊であり、人の経歴(想念行為)を調べるならば、守護霊に聞くことである。意識の段階によって異なるため不可能なことが多いと思われる。

5-4-2.指導霊への祈り

指導霊とは、人間の潜在意識のある芸術、音楽、技術、学業、研究、スポーツなど専門分野の能力をサポートする霊団である。守護霊団のうち生者の才能をつかさどる複数の霊が指導に当たり、必要な能力に応じて交代する霊団。指導霊は生者が努力するごとに指導霊との関係は深くなり、多くの助言を与えることが可能となる。逆の場合では、影響を及ぼすことが困難になり、指導霊がいなくなる場合もある。潜在的には、守護霊の下に多数の霊が指導霊候補として控えている。潜在意識のある本体と分身が、我この世に生まれた人の一生を見守り、魂の向上に努力を払う霊である。過去に医者を経験がなく、今世に医者になった場合、心の調和度によって、より高次元の指導霊がついて示唆をあたえてくれることもある。守護霊が指導霊を兼ねて、その人を守りながら指導してくれる霊もある。ゆえに、魂に感謝し、祈りと言う想念と行為を怠らないならば、真に安らぎと幸福になるものである。反対に不調和(自我我欲・自己保存・自己顕示欲)になると長期に不幸を招くでしょう。広義には、人類や国、集団などを指導する高級霊を指す場合も

あるが、不調和な自国の利益・自国保存の願望が多くなると長期に不幸を招くものである。

5-4-3. 自然への感謝

自然への感謝とは、宇宙の心と人間との心とを結ぶ感謝の祈りである。人間は心と肉体の構成物である。重要なことは、各人の心である。心は素直で、自由でと安らぎのある世界をつくるべきである。なのに、先天的、後天的因果関係によって円満さを欠け、不幸な状態となり、社会も不安定な環境になっけていても、何れは、次第に修正されることを念願している。

5-5. 万生万物への祈り

万生万物、我が現象界の修行にご協力、心から感謝する。人間は、五体を持つ「この世の人間」と五体を持たない「あの世の人間」がいる。「あの世の人間」は、光子体というボディがある。「この世の人間」は、原子細胞からなる肉体という船に乗って人生航路を渡っている。肉体という船には、水・燃料が必要である。地上には、生存に必要な太陽の光・水・空気のエネルギーを無償で与えてくれている。この無償エネルギーがないと、この世に生まれることも、生きることも出来ない。科学の進歩によってで創造し、人工的に多くの製品が完成しても、素材は大自然から生成するものである。同様に、肉体維持の素材は、すべて、大自然からの恵みであることを悟ることが大切である。そのため、万生万物に対して感謝し、「いつもしむ」ことを心から感謝すべきである。

5-6. 先祖代々の諸霊への祈り

先祖代々の諸霊、我に修業の体を、お与えくださいまして、心から感謝します。諸霊の冥福を、心から供養いたしております。人間の肉体は、この世の現象界に千年、2千年に一度しか生まれなく。生まれる前は先祖代々の諸霊による調和と努力の結果に生まれることは前世の約束である。生まれた子供の顔を見てほっとする両親やその関係者は最大の喜びと感じられる。成長しながら、先祖代々の諸霊に心から感謝するのは当然の義務と言える。この義務とは供養の意味である。供養とは、調和への行為である。感謝の心とは、調和への行為となる循環の法則であって、先祖代々の諸霊も大自然の光エネルギーをいただくのである。

この世が調和されると、あの世も調和される。この世が悪化されると、あの世も悪化される循環の作用・反作用の法則がある。調和への向上は、用意ではなく、先祖代々の諸霊は子孫の家庭に行くことがある。家庭内に不幸な事や不調和な行為が満ちることがあれば、地縛霊の先祖霊は、苦しい環境から逃れるために家庭の人に憑依され、家庭内に不幸な事や不調和な行為が満ちることがある。一方、家庭は幸せで調和な行為が満ちることがあれば、地縛霊の先祖霊は、自分の想念に疑問を持つため、反省材料を得ることになる。ゆえに、家庭内の調和の生活が一番である。先祖代々の供養とは、感謝の心が祈りになり、調和の心が行為になって時に実を結び循環の法則・作用と反作用の法則が認められる。

5-8. 祈りの対象

人格的な超越者	神や仏	愛する人物・愛	人間の存在様態を同情的に配慮
非人格的な超越者	宇宙の法則・生命の原理・道・聖霊等の人間に応じない	怒る人物・法則・愛も妥協もなく、人心の機微にふれない	寸分の狂いもない法則として整然と運行する

超越者とは、人間の自己と自然の世界を越えた者。イエスの「愛」と釈尊の「慈悲」の心を持った神や仏である。時空間を超越している超越者は、自我を超越しながら包摂している。祈る以前に内容を知悉し、逆に、人間に祈りを送り届けている。我が祈りは、神仏への呼びかけではなく、反対に、神仏からの呼びかけ(祈り)に対する応答であって、大きな生命の磁場の中に生きている私たちは、一瞬たりとも外に出ることはできません。十界とは、人間の心の境地を十種に分類している。①地獄界・②餓鬼界・③畜生界・④修羅界・⑤人界・⑥天界までが仏教の6界という。さらに4界を加える⑦声聞界・⑧縁覚界・⑨菩薩界・⑩仏界(如来界)になる。

5-9.祈りの本源:どんな時に祈るか

生病老死の本然的苦の時	苦から、逃れない時	絶望に打ちひしがれた時	自分の思いが通らない時
無視された時	馬鹿にされた時	挫折から立ち直れない時	哀しくて仕方がない時
迫害され、弾圧された時	嬉しい時	怒りや憎しみに負けそうな時	恥ずかしい時
差別された時	大切なものを失った時	平静さを失った時	苦しい時
新しいことに挑戦する時	未知な世界に踏み出す時	誰も理解してくれない時	自分の罪や過ちを認める時
生まれ変わろうとした時	救いを求めた時	成功した時	危機に陥った時
人の罪や過ちを正す時	何かを誓う時	最愛の人を失った時	生きる希望がなくなった時
何も信じられなくなった時	自分の無力さに気づいた時	重い病に冒された時	神を信じられなくなった時
自分の思いを願う事	自分が窮地にたった時		

神の本質は、愛です。至上の愛である。許し合う以外に、救いはないのです。だからこそ、神の本質は、愛なのである。愛は、祈りであり、神への祈りである。神のみが自分の思いを受け止めてくれる。それが、至上の愛である。神を信じるだけで、幸せになれば、人は、信じることによって癒される。神を信じ、自分を信じる時、祈るのもある。人の思いは、わかろうとしても、わからない。永遠の愛を誓った者達が、些細な事で別れていく。子をなした愛だからだというのに、結局、何も、わからなかった。わかってもえなかった、分かり合えなかったとつぶやいて別れていく。

自分のお腹を痛めて産んだ子ですら、時々理解できなくなる。血を分けた、兄弟同士が、醜い争いをして世の中を騒がせる。なぜかと神に問う。全ての思いが、伝わると思う事が、愚かなのだ。なぜなら、思いは、自己の内面にあり、自分の思いは、神にしか通じない。だから、人は神を必要とし、神に祈る。神に、祈ることによって、相手を許し、自分をも許す。その時、人に自分の思いが通じるようになる。なぜなら、人は、思いの後ろに神を感じるからであり、相手の後ろに神を見いだすからでもある。故に、神の本質は愛で、人を癒すことのできるのも神だけである。神の本質は、裁くことではなく、許すことである。ただ、ひたすらに許す。それが、神の本質というものである。

神に祈ることで、神の意志を変えようと思っても無駄で、神の意志は、不変である。神に祈ることによって変わるのは、あなた自身である。だから、ひたすらに祈るのである。祈る事によって神の英気を心に養うこと、生きる勇気を得て、魂の救済を求めるのである。明日への希望を持つことであり、祈りは、神のためにするのではなく、自分のためするのであって、あなた自身が救われるためである。故に、祈り、そして感謝するのであり、祈りによって現世利益を求めるのは愚かである。

いかに科学、医学が発達しても、生病老死の苦しみから、逃れられるわけではない。輝いている人もやがては古い、死んでいかなければならない。相手を思い、悩み苦しんでも、届かぬ思いがある。どんなに用心と注意しても、不慮の事故に、遭遇することがある。すばらしい出会いにも、必ず哀しい別れがある。人は、避けられぬ運命に出会った時、ただ、ひたすら

に、祈るしかない。何を祈るのかは、胸に手を当てて考えれば自ずから分かるようになる。

6.おわりに

高橋信次先生による著書の祈りとは、「神仏の心と己の心との対話である。同時に感謝の心と祈りでもある。神理にかなう祈り心で実践に移るとき、神仏の光はわが心身に燦然と輝き安らぎと調和を与えずにはおれない」と書かれている。その前文には「私たちは神との約束により、天上界より両親を縁として、この地上界に生まれてきた。慈悲と愛の心を持って調和を目的とし、生きて行くことを誓い合いました。しかるに、地上界に生まれ出た私たちは大宇宙(天上界)での神との約束を忘れ、周囲の環境・教育・思想・習慣、そして、五官に翻弄され、慈悲と愛の心を見失い、今日まで過ごしてまいった……)等がある。

この地球で起こるすべての現象は一定の法則に従っている。地球は、神のエネルギーの恩恵を受けている太陽の周りを回っている。物を空に向かって投げても、地球のほうへ落ちてくる万有引力の法則がある。人間は、崩壊の法則ではなく、構築の法則によって成り立っている。この大宇宙にも法則があり、その法則は人間の法則にも似ている。人間は卵子と精子が結合して細胞分裂して、280日かかって完全な人間を作る。原子の集まりが分子であり、その分子が集まって1つの細胞が構成でき、脳が発達して、高次機能を持った人間が誕生する。大宇宙の法則は、意思意識を持って生き、地球も心を持った生命体と言える。宇宙にも一定の法則があり、人間も流転の法則の中で生かされている。我々は生かされていることに感謝し宇宙とともに生きたい！この貴重な人生に時を無駄にせず、価値あることを残したいと思い、ここで、人間の生きる呼吸のレベルを、次のように分類した。

吸気	息を吸う	肉体の呼吸	酸素を吸って、二酸化炭素を出す
止吸	息を止める	気の呼吸	生氣論的世界観で重視する微細なプラーナ
呼気	息を吐く	靈的呼吸	超越者の言や光の受容と摂取(魂の呼吸)

外呼吸:外から酸素を吸って、二酸化炭素を外に放出する。外呼吸を念頭に置く。**内呼吸**:生体の組織や細胞が酸素を取り入れ、酸化還元を行い、運動エネルギーを獲得する。**呼吸のメカニズム**:肺は、人体の中で唯一、体外に開放される臓器であるため、外部の環境に大きく左右される。化石燃料、排気ガスと大気汚染やストレスにも影響する。呼吸には、「気の呼吸」・「体の呼吸」・「心の呼吸」があり、丹田呼吸法もある。肺は、自力では動かず、周囲の胸部が動く方向で左右される受動的な活動をする。**息を吸う**と筋肉の横隔膜が収縮して下方に移動することで、胸郭が上下に拡大すると、肺が膨らみ空気が入る。横隔膜が安静時には**1~2cm程度**移動するが、**腹式呼吸では10cmも**移動する。**息を吐く**時には、吸気時に収縮した呼吸筋(横隔膜・)の弛緩と肺の縮もうとする力によって自然に元の位置に戻り、肺が収縮される。**呼気**と共に言葉が発声され、思考が展開する。**吸気**と共に言葉が吸収されて休息し、思考を休止する。「**気の呼吸**」、体と心の制御に直結し、心身交換の調整から超えて「**心の呼吸**」に通じ、息の根である「**魂の呼吸**」といえる。

胸式呼吸	寝るとき横隔膜が動きにくい胸式が中心	首、肩の筋肉の働きによる	胸郭の拡大・縮小によるもので、肩が上下に働き、換気量が小さく、交感神経が優位。
腹式呼吸	胸と腹部を分ける横隔膜の筋肉を使う呼吸	横隔膜が上下すると腹圧も変る腹部の働きによる	横隔膜が上下動によって、腹が前後に動き、換気量が大で、副交感神経が優位。
胸筋呼吸	意識した腹式呼吸	横隔膜の横と腹筋は大振幅	息が大。
横隔膜呼吸	通常の腹式呼吸	横隔膜の横と腹筋は小振幅	息が小。

式呼吸は、胸筋呼吸と横隔膜呼吸に分類できる。**胸筋呼吸**は、腹筋の収縮によって内臓が圧迫され、横隔膜が押し上げられ「肺」中の空気が吐き出され、腹筋の弛緩によって内臓への圧迫が解除され、横隔膜が下がって空気が吸い込まれる仕組みである。**丹田呼吸**は、丹田は不老不死に通じる精気を貯えて気力を充実させる方法である。**釈尊呼吸**:出る息を長くする「長息」と、瞬間的に強く出す「短息」がある。いずれも、呼気に中心がおかれる。**短息**は、作業時の瞬間的な腹圧呼吸で、全身の静脈血が心臓へ送り込み。体調を調整する。「**長息**」:座禅や静座の時に、出息長・入息短である。頭全体における静脈血の心臓還流が活性化する。

(2017年12月25日受稿、2018年1月25日掲載決定)

参 考 文 献

- 1) 高橋信次:『原説般若心経 内在された叡智の究明』、三宝出版、1971年。
- 2) 高橋信次:『心の原点 失われた仏智の再発見』、三宝出版、1973年。
- 3) 高橋信次:『人間・釈迦 1.偉大なる悟り』、三宝出版、1973年。
- 4) 高橋信次:『心眼を開く あなたの明日への指針』、三宝出版、1974年。
- 5) 高橋信次:『心の指針 苦楽の原点は心にある』、三宝出版、1974年。
- 6) 高橋信次:『人間・釈迦 2.集い来る縁生の弟子たち』、三宝出版、1974年。
- 7) 沢 勲:「科学技術と精神(心)」、関西大学工学会誌(工学と技術)、5、1974年。
- 8) 沢 勲:「精神力強化法」、清交 356、1975年。
- 9) 沢 勲:「西ドイツ紀行と大学」、清交 365、1975年。
- 10) 高橋信次:『心の対話 人のことば天のことば』、宝出版、1976年。
- 11) 高橋信次:『人間・釈迦 4.カピラの人々の目覚め』、三宝出版、1976年。
- 12) 沢 勲:「意思決定超科学システムと信頼性管理へのアプローチ」、日本PS学会誌サイ情報 5、1979年。
- 13) 沢 勲:「教育とフィードバックの信頼性」、日本PS学会誌サイ情報 6、1980年。
- 14) 沢 勲:「正法とフィードバックの信頼性」、日本PS学会誌サイ情報 7、1980年。
- 15) 沢 勲:『信頼性管理』、沢企業管理社、1981年。
- 16) 沢 勲:「愛することは」、清交 458、1983年。
- 17) 沢 勲:「親と子の愛」、清交 463、1984年。

- 18) 沢 勲:「名のない夫婦の道」、清交 470、1984 年。
- 19) 沢 勲:「静かな根」、清交 475、1985 年。
- 20) 沢 勲:『ざ・沢勲詩集 I』、編集工房ノア、1990 年。
- 21) 沢 勲:「ざ・般若心経の心と科学について」、大阪経済法科大学総合科学研究所年報 9、1990 年。
- 22) 棚次正和:『宗教の哲学』 創言社、1991 年。
- 23) 沢 勲:『ざ・沢勲詩集 II グラフィック・メタファ』、啓文社、1993 年。
- 24) 沢 勲他:『経法大学生の体力分析 I-V』、大阪経済法科大学、1995 年。
- 25) 沢 勲他:「コンピューター解析による大阪府下高校生の意識解析 I」、大阪経済法科大学論集 61、1995 年。
- 26) 沢 勲他:「コンピューター解析による大阪府下高校生の意識解析 II」、大阪経済法科大学論集 62、1995 年。
- 27) 沢 勲他:「コンピューター解析による大阪府下高校生の意識解析 III」、大阪経済法科大学論集 63、1996 年。
- 28) 沢 勲他:「コンピューター解析による大阪府下高校生の意識解析 IV」、大阪経済法科大学論集 65、1996 年。
- 29) 沢 勲他:「コンピューター解析による大阪府下高校生の意識解析 V」、大阪経済法科大学論集 66、1996 年。
- 30) 棚次正和:『宗教の根源 祈りの人間論序説』 世界思想社、1998 年。
- 31) 沢 勲:『ざ・沢勲詩集 III…四季の心』、現代創造社、1998 年。
- 32) 沢 勲他:「IT による健康科学の血液と尿検査の統計分析」、大阪経済法科大学論集 94、2008 年。
- 33) 沢 勲他:「IT による血液と尿の検査値の相関性」、大阪経済法科大学論集 95、2008 年。
- 34) 沢 勲他:「血液と尿検査値に対する検査年齢のVigotモデルと線形特性の研究」、大阪経済法科大学論集 95、2008 年。
- 35) 高橋佳子:『新祈りのみち』、三宝出版、2008 年。
- 36) 棚次正和:『祈りの人間学-いきいきといきる』、世界思想社、2009 年。
- 37) 沢 勲・朴 永晷:「先史時代インド国、般若心経のモデル化、人間の精神と健康管理」、洞窟環境 NET 学会、紀要 5 号、2014 年。
- 38) 棚次正和:『超越する実存 人間の存在構造と言語宇宙』 春風社、2014 年。
- 39) 棚次正和:『新人間論の冒険 いのち・いやし・いのり』 昭和堂、2015 年。
- 40) 沢 勲:「八正道の帰還システム」、洞窟環境 NET 学会、紀要 7 号、2016 年。
- 41) <https://ja.wikipedia.org/wiki/反省>。
- 42) <https://ja.wikipedia.org/wiki/座禅>
- 43) <https://ja.wikipedia.org/wiki/いのり>